様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１１８９２

研究課題名（和文）近代日本の国家主義・民族主義と男性性：近代家族イデオロギーとの接合を中心に

研究課題名（英文）Nationalism, ethnocentrism and masculinity in modern Japan : focusing on ideological linkage with the modern family values

研究代表者
海妻　径子（Kaizuma, Keiko）

岩手大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：１０４２２０６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：経綸学盟の結成［1923／大正12年］以降から終戦までの、いわゆる戦前の国家主義・民族主義を、（１）国家社会主義理論系（２）農本アナーキズム系（３）日本主義労働運動系（４）国体明徴運動関連団体系（５）純正日本主義思想・文学運動系の５類型に分類した上で、代表的運動団体の発行物・指導者層の著作を、近代家族イデオロギー、男らしさ観、ミソジニー、ホモソーシャルの諸要素に注目した言説分析をおこなった。
夫婦間の情愛を、近代西欧的ではなく日本的なものとみなした上で称揚する言説が、農本アナーキズム系と純正日本主義思想・文学運動系に比較的みられた。その文脈で尊王運動にかかわった女性の称揚もみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国家主義・民族主義を封建遺制としてではなく、そこにおける近代的要素に着目する研究が蓄積されてきたにもかかわらず、近代家族イデオロギーとの関連は十分明らかにされてこなかった。だが国家主義・民族主義の論理構造に、夫婦間の対等性や情愛の強調といった近代家族イデオロギーの諸要素がどのように接合可能なのかは、性別役割を強調する極右や保守運動に、主体的にかかわる女性の存在が注目される昨今、これらの女性たちがいかに自らが女性であることと、保守運動の論理との整合性をはかっているかを理解する一助となる。

研究成果の概要（英文）：Nationalism and Ethno-centrism discourse written from the establishment of Keirin-Gakumei[1923/Taisho 12] to the end of the WWII are classified into five types: (1) national socialism, (2) anarchist peasantism, (3) Japanese nationalistic Labor Movement, (4) Kokutai-Meisho movement, and (5) nationalistic ideology and literary movements. I analyze the discourse of articles written or published by far-right movement leaders or groups, focusing on the combination of factors like as Modern Family Ideology, masculinity, misogyny and homosocial.
In the discourse typed (2) anarchist peasantism, and (5) nationalistic ideology and literary movements, love between husband and wife is relatively emphasized. These discourse although describe such love as something in Japan rather than in modern Western. By the same logic, the women engaged in the Son-no(Reverense the Emperor) movement are praised as affectionate wife or mother.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：男性性　ジェンダー　近代家族　日本史　イデオロギー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

90 年代後半以降の歴史社会学的分析は、天皇制国家への国民統合には「儒教的家族主義」のみならず、近代家族イデオロギーも重要な役割を果たしたことを明らかにした（牟田和恵『戦略としての家族』新曜社、1996 年、小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999 年、ほか）。家族主義と結びつきつつ構築された近代日本のジェンダー秩序を、単純な「封建遺制」とはみなし得ないことが、示されたといえる。

他方で、近代西欧国家的な国民統合を推進する政府とは一線を画し、農本主義アナーキズムや国家社会主義などのいわゆる「右翼的」立場から体制に反対する人々にも、家族主義的主張がみられたことは、かねてから指摘されてきた（武田共治『日本農本主義の構造』創風社、1999 年、ほか）。しかしその家族主義はしばしば単純な反動主義・懐古主義的な主張とみなされ、90 年代後半以降の近代家族論の議論を踏まえての、これら農本主義アナーキズムや国家社会主義に対するジェンダー・パースペクティブからの再考・再検討は、管見の限りほとんど行われていない。

だが反近代主義もまた一種の近代思想であることを考えれば、反近代主義思想としての農本主義アナーキズムや国家社会主義と、近代家族イデオロギーとの接合自体は、特異なものではないはずである。実際、たとえば近代日本における国家社会主義の代表的著作のひとつである北一輝『日本改造法案大綱』（1923）では、婦人参政権が否定される一方で「婦人は家庭の光にして人生の花なり。婦人が妻たり母たる労働のみとならば、夫たる労働者の品性を向上せしめ、次代の国民たる子女をますます優秀ならしめ、各家庭の集合たる国家は百花爛漫春光駘蕩たるべし」という、近代家族イデオロギーにもとづく言説に用いられる、典型的表現がみられる。農本主義アナーキズムや国家社会主義などのいわゆる「右翼的」運動は、その団体構成員が男性に偏重していることもあり、女性嫌悪的主張のみにもとづいて展開されたかのように捉えられがちであるが、「マルクス主義とは異なるかたちでの社会的資源の再配分を構想・要求する」という側面をもつこれらの運動は、ジェンダー秩序についても前近代的秩序観の単純な維持復古ではなく、彼らなりの新たな「全体主義的対等性」を構想していた可能性がある。これまでの研究において看過されてきた以上の点について、明らかにする必要がある。

２．研究の目的

近代日本の男性性構築過程を、国家主義・民族主義およびその関連イデオロギー・思想の 形成と社会作用との関連において把握することを試みる。具体的には（a）いわゆる戦前の国家主義・民族主義の代表的運動団体および指導者を、支持基盤層（農村旧中間層／都市新中間層／上層労働者層）別および近代家族イデオロギー・ミソジニー・ホモソーシャルとの接合別に 4～6 タイプに分類し、各団体刊行物・指導者著作の言説において、夫と妻の情愛による結びつきを重要視する近代家族イデオロギーが、どのような男らしさ観を媒介に、ミソジニーやホモソーシャルを含有する国家主義・民族主義および関連イデオロギー・思想と接合可能となるのかを、明らかにする。(b) 前記(a)をふまえ、日本主義、国家社会主義・天皇制イデオロギーなど、日本における近代国 家形成・国民化に関し議論されてきた諸概念を、ジェンダー・パースペクティブで再検討・再定義する。

３．研究の方法

分析対象とする運動団体・指導者は、永田哲朗編『戦前戦中 右翼・民族派組織総覧』（国書刊行会、2014 年）等の資料に基づき、諸系統を整理した上で、刊行物の保存・入手可能状況もかんがみつつ、十数団体・個人を選定する。

分析対象時期は、経綸学盟の結成［1923／大正 12 年］以降終戦までとする。まず近代日本における国家主義・民族主義に関する先行研究の知見を整理して第一次の分析対象団体・個人を確定し、分析対象資料の収集と、諸要素の抽出整およびデータベース化を行う。

また言説分析は、日本主義や国家社会主義、天皇制イデオロギーをめぐる先行研究に照らし検討する。

４．研究成果

近代日本における国家主義・民族主義に関する先行研究の知見を整理し、また前記永田らの資料をもとに、分析対象団体・個人を以下のように分類した。

（１）日本主義労働運動系（親和的な団体としては、急進愛国労働者総連盟や愛国政治同盟など）として、下中彌三郎が中心となって発行した雑誌『雄弁』、

（２）国家社会主義理論系（親和的な団体としては、経綸学盟や日本社会主義研究所など）として、北昤吉らが中心となって発行した、かつ国家社会主義系としては比較的大衆的な雑誌『祖国』、

（３）国体明徴運動関連団体系（親和的な団体としては、原理日本社や国体擁護連合会など）として、蓑田胸喜と思想的に近い人々が執筆し、また復刻版も出てまとまった分析をおこないやすい新聞批評誌『新聞と社会』、

（４）農本アナーキズム系（親和的な団体としては、愛郷塾など）として、権藤成卿らによる雑

誌『制度と研究』、
（５）純正日本主義思想・文学運動系（親和的な団体としては、日本主義学生運動や日本浪漫主義運動など）として、日本浪漫派機関誌『日本浪漫派』および『文藝文化』
これらの言説分析から明らかになった点として、
１、女性執筆家の言説はそれほど多くないが、赤松明子・小池元子・陶山倭文子・小宮山英子・権藤誠子らによる執筆が確認できた。経歴が確認できた者は、男性運動家の配偶者等の女性家族員である場合がほとんどであった。
２、日本主義労働運動系をめぐる言説については、日本における男性職人・肉体労働者層の親方子方関係の変容として説明できる部分と、西欧近代工業技術の習得者たる男性エリート技術者層における日本型フラタニティと近代家族イデオロギーとの複合的形成として説明できる部分とがあり、前近代的労働者層も含む広義の男性労働者層の近代基本における編成の変容と関連付けつつ説明することの有効性を明らかにすることができた。
３、国体明徴運動関連団体系、日本主義学生運動や日本浪漫主義運動など純正日本主義思想・文学運動系における言説のうち、女性の執筆は近代短歌を中心とした「国文学」の実作に偏っていた。「国史」や「国文学」形成過程と、彼女たちが「国文学」形成運動にどのようにかかわっていたのかの解明は、今後の課題である。
４、国家社会主義理論系に分類される上杉慎吉には、近代女性論等、近代家族イデオロギーに関わる言説の存在が確認できたが、分量が多くないため、十分な内容分析のためには引き続いての言説抽出が今後の課題ある。
５、他方で農本アナーキズム系の遠藤友四郎は高畠素之の国家社会主義理論を批判する一方で、パンフレット『日本主義の確立』（無水庵、1926）において「男性日本」観を展開しており、天皇制という有機的な国家観を遠藤が展開する上で、有機的（「いざなぎ・いざなみ」により表象される）男女相補性に立脚する「男性日本」観に至ったことが明らかとなった。
６、同じく農本アナーキズム系の西川光次郎は著書『悪人研究 続編』（洛陽堂、1913）や『偉人の恋物語』（大日本雄弁会、1914）、『生活の力となる道徳』（北文館、1917）の「家内なぞは分からん」「細君道徳」の章において、女性観や家族観、青年成長物語を介した男性観を展開しており、前記遠藤とも共通する、日本／西欧の二元的かつ前者を男女相補的で後者を男女対立的とみる神話的・宗教的理解が、農本主義アナーキズムを展開する上で重要な役割を果たしていたことが明らかとなった。
７、前記のような日本／西欧の二元的かつ前者を男女相補的で後者を男女対立的とみる神話的・宗教的理解は、農本アナーキズム系のみならず純正日本主義思想・文学運動系にも比較的みられており、したがって夫婦間の情愛の強調という近代家族イデオロギーが、近代西欧的ではなく日本的なものとみなした上で称揚することで、国家主義・民族主義に接合することがみられたといえる。尊王運動にかかわった女性の称揚も、このような夫婦間の情愛の強調の文脈でみられることが確認できた。
８、他方で国体明徴運動関連団体系の分析は、時間的・収集できた資料の分量的に十分におこなうことができなかったため、今後の課題として残されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 海妻径子	４．巻 740
２．論文標題 戦間期無産政党の女性「大衆」組織化 ： 社会民衆婦人同盟に注目して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	６．最初と最後の頁 28 - 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関